

論 文

カンガンハリの「初転法輪」図について

佛教学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程

中 西 麻一子

1. はじめに

ブツダが悟りを開いた後、最初に説法を行ったことを物語る仏伝の一場面は「初転法輪」と呼ばれ、初期韻文経典から単独の散文経典に至るまで多数の文献資料が存在する¹。他方、初転法輪伝説が図像によって表現されるのは、Ajanṭā前期石窟(Sātavāhana B.C.1: 第10窟 左側壁面)や Sāñcī 第1塔(Sātavāhana A.D.1 初: 西門第二横梁正面)を初めとするインド古代初期仏教美術の段階からであった²。しかしながら、「初転法輪」図(あるいは「初説法」図)についての研究は、それぞれの作例に対する解説や言及はみられるが、「初転法輪」図そのものを主題とした論考はみられない³。そこで、どのような表現によって「初転法輪」図と同定されるのかを Gandhāra 地域 Loriyān-Tangai (A.D. 2-3: Indian Museum, Calcutta) から出土した「初転法輪」図の一例に従って初めに確認しておく。その「初転法輪」図には以下の特徴が挙げられる(図1参照)。

- ①ブツダが法輪と鹿野苑を暗示する**2頭**の鹿を表した台座の上に座す。
- ②ブツダは左手に衣端を握り、右手を挙げて説法を行う姿をしている。
- ③**5人**の比丘(最初の仏弟子)がブツダの周囲に座し、視線をブツダの方に向けている。
- ④神々もブツダの周囲に現れ、合掌したり、花を掲げて祝福している。

この4つの特徴は、ブツダや仏弟子の姿を表現し始めた1世紀後半以降の表



図1 Gandhāra Loriyān-Tangai 2-3世紀 カルカッタ, インド博物館蔵

現であり、初転法輪伝説の場面として必要な要素(鹿・法輪・五比丘)が全て描き込まれている。我々の知る初転法輪伝説を正確に図像化していると言える。本稿ではインド古代初期仏教美術にみられる「初転法輪」図の成立過程を整理し、Gandhāra 地域から出土した「初転法輪」図より以前の「初転法輪」図の図像学的特徴を考察する。そして、その成立過程に基づき、カンガンハリから出土した上段レリーフ石版 No.01 (以下 Kanganhalli 01 と省略) に描かれた「初転法輪」図の図像表現を、新たな「初転法輪」図の一例として加えることを目的とする。

2. 初転法輪伝説の伝える情景とその図像表現

初転法輪伝説については、水野弘元 [1996] が初転法輪伝説を伝承する諸経典を収集し、ブッダが初めて説法した際に何を説いたのかを比較し考察した論究がある。しかし、「初転法輪」図の図像表現を解明するためには、説法の内容ではなく、その前後に物語られる情景描写を文献資料中に探ることがより重要になるであろう。個々の図像によって表現の差異はあるが、基本的にガンダーラの「初転法輪」図は、先に挙げた「初転法輪」図のように、ブッダの周囲

に鹿・法輪・五比丘を配置して初転法輪伝説を表現している。すなわち鹿・法輪・五比丘が「初転法輪」図の情景であると言える。他方、文献資料においては、これら「初転法輪」図を表すために必要な要素が一度にまとめて語られ始めるのは、ブッタの一生涯を物語る仏伝の一場面として意識的に初転法輪伝説が語られる段階まで待たねばならない⁴。従って、「初転法輪」図にみられる個々の情景描写が文献資料と図像資料にどのように表現され始めるのかを順に整理しておく必要がある。まず、初期経典に保存される初転法輪伝説の情景描写を確認することから始めたい。

仏伝の一場面として初転法輪伝説が語られる以前のブッタの初説法について触れる記述は、初期経典中の韻文資料に散見される。その中でも古い伝承を保存しているのは、*Sutta-nipāta*（以下 *Sn.* と略す）（*Nālaka-sutta* 第 684 詩節）の伝える初転法輪伝説である。日中にアシタ仙によって、歡喜する神々の姿が天界で目撃される。神々は、ブッタが誕生したことをその理由に挙げ、ブッタが説法を行うことを予期している。以下に該当箇所を提示する。

*so sabbasattuttamo aggapuggalo narāsabho sabbapajānam uttamo,
vattessati cakkam isivahye vane nadaṃ va siho balavā migābhibhū.*

(*Sn.* pp.132¹⁷–133²)

「あらゆる存在の中で最上であり、第一人者である人、牡牛のような人であり、全ての人々の中で最上である彼は、仙人という名の林で、[法] 輪を回転させるでしょう。あたかも、力を具え、鹿達を征服する獅子が吼えるように」

古層に位置する *Nālaka-sutta* の冒頭部分に記されたこの詩節から「初転法輪」図の情景として指摘出来ることは、(1) ブッタが初めて説法した場所と、(2) 初めての説法が（法）輪を回転させると表現されることの2点である。説法の対象者や説法内容については触れていない。従ってこの記述を手掛かりに、これら2点の記述が初転法輪伝説を離れた文献資料と図像資料にどのよう

に描写されているのかを確認する。

(1) ブッダが初めて説法した場所

Sn. 第 684 詩節が伝える仙人という名の林 (isivahya vana) というのは、古代には仙人墮処 (Skt. ṛṣipātana, P. isipātana) または、鹿野苑 (Skt. mṛgadāya, P. migadāya) と呼ばれた現在の Sārnāth のことを指している。ṛṣipātana という場所は Bhārhut (Śunga B.C.1 : 笮石) の図像に表現されており、Lüders [1941] がそれを詳細に解説している (図 2 参照)。図像の左上に、三人の辟支仏達が左手に水瓶を持ち、上空を飛行している姿が確認出来る。図像の右半分は欠けているが、4 人目の辟支仏の肩部分が僅かに残っていることから全員で 5 人描かれていたとされる⁵。飛行する辟支仏の真下には、炎が石台の上で燃え上っている。リュースターは、Mahāvastu (以下 Mvu. と略す) や Lalitavistara に説かれる ṛṣipātana という地名の由来についての記述を引用し、辟支仏が般涅槃する時、天空に高く飛び上がり、自らの火界 (定) で肉と血とを焼きつくし、骨が地上に落ちた。ここで聖仙 (ṛṣi) たち (=辟支仏) が落ちたのでリシパタナという名前となった⁶。という地名の由来に関する話が図像として描かれていると解釈している⁷。このような地名の由来についての話は、Mvu. の制



図 2 Bhārhut 紀元前 1 世紀 カルカッタ, インド博物館蔵

作者が自ら考案したとは考え難く、むしろ以前に伝聞した話を挿入したと考えるのが妥当であろう。なお、*Mvu.* では *ṛṣipātana* という名前の由来が語られた直後に、ニグローダ鹿王 (*Nigrodhamiga Jākata*, no.12) の説話が続き、鹿野苑と呼ばれる地名の由来を説明している⁸。*Bhārhut* の図像表現が *ṛṣipātana* の由来を描写した図像ならば、紀元前1世紀頃の段階で *ṛṣipātana* という場所は、地名の由来と共に知られていた場所であったことが分かる。

(2) 法輪を回転させるという記述

次に *Sn.* 第684詩節に伝承される「彼は〔法〕法輪を回転させるでしょう」(*vatte-ssati cakkam*) というフレーズによって示された情景描写について考察する。このフレーズは *Sn.* の *Nālaka-sutta* 以外にも散見され、図像においても初転法輪伝説とは関連の無い法輪の図像が存在する⁹。*Bhārhut* から出土した南門屈曲欄楯の内面上段区画に描かれた図像 (*Śunga B.C.1 : Prasenajit Pillar (P 29)*) は、「世尊の法輪」(*bhagavato dhamachakam*) と刻まれた碑文を伴い、ブッダとプラセナジット王に関連のある説話が描かれている¹⁰。それはつまり、「法輪を回転させる」というフレーズとその図像表現が初転法輪伝説の成立より以前、もしくは同時代に平行して存在していたことを示唆している。従って、このフレーズを理解するために、*Nālaka-sutta* と同じ *Sn.* 中に収められた *Sela-sutta* 第554詩節前後の記述を辿り、より具体的な法輪に関する内容と、それに対応する図像表現を確認しておこう。*Sela-sutta* では、三十二相を具えた偉人が歩む2通りの道として、出家の生活を選択してブッダになること、あるいは、在家の生活を選択して転輪王 (*Skt. cakravartī-rājan*, *P. cakkavattī-rājan*) になることが語られており、両者の立場を読み取ることが出来る。ブッダはその箇所、以下の詩節によって自らの立場を明言している。

*rājāham asmi, selā ti bhagavā, dhammarājā anuttaro,
dhammena cakkam vattemi, cakkam appaṭivattiyaṃ.*

(*Sn.* p. 109³⁻⁷ = *Thera.* p. 79¹⁻²)

世尊は〔答えた〕「セーラよ。私は王である。

最高の、ダンマ（道理）の王である¹¹。

ダンマによって、反転することの無い輪を回転させます」

初期經典中の転輪王について詳細に考察した藤田宏達〔1954〕によると、転輪王は全世界に正義を以って君臨する理想的王者に与えられる呼称であり、仏教とほぼ同時代のジャイナ教、バラモン教の文献にも表れていることから、この頃から一般的に流用されていたものであるとされる。それらの文献資料を精査した Gonda〔1966〕は、転輪王の本来の意味を「輪によって及ぶ支配の中央に存在する者」と理解している¹²。韻文資料中に説かれた「法輪を回転させる」というフレーズは、ブッダの初説法について触れる記述に使用されると同時に、転輪王に関係する記述でも使用されていたことが分かる。この転輪王の姿は、インド古代初期仏教美術に位置付けられる南インド Jaggayyapeṭa の「転輪王」図（B.C.1 後：チェンナイ州立博物館）や Amarāvati 近郊から出土した「転輪王」図（B.C.1 後：ギメ美術館）によって知られており、転輪王の周囲には王が具えるべき七宝が並んでいる¹³。ここで注目すべきことは、両者共に七宝の一つである輪宝（*cakkaratana*）が法輪柱の造形によって描かれていることである（図3参照）。転輪王の所有する輪宝が本来何を意味するのかは種々の説が存在する¹⁴。しかし少なくとも、紀元前1世紀後半頃に図像化された転輪王の輪宝が、日輪（discus of the sun）、武器としての輪（wheel）や戦車を意識して表現していないことは明らかであり、むしろ Sela-sutta 中に「彼（転輪王）はこの大地を海岸に至るまで、棍棒によらず、刀剣によらずに、ダンマによって征服して、占拠する。」（*so imaṃ paṭhavim sāgarapariyantam adaṇḍena asatthena dhammena abhivijīya ajjhāvasati. Sn. p. 106¹⁷⁻¹⁹*）と表現される転輪王による理想の統治を、法輪柱によって描写していると言える¹⁵。なぜならば、輪宝を法輪柱によって描く背景には、初転法輪の地である Sarnāth に建立された Aśoka 王柱（Maurya B.C. 250：下部は現地・柱頭はサルナート考古博物館）の造形が大きく関与していると考えられるからである。柱頭に背合わ



図3 Amarāvati 近郊 紀元前1世紀後
ギメ美術館蔵



図4 Bhārhut 紀元前1世紀 カルカ
ッタ, インド博物館蔵

せで立つ四頭の獅子の上には法輪が載せられており、本来の姿は法輪柱と酷似している。つまり紀元前1世紀頃の段階で、転輪王の輪宝が法輪柱によって描写されたことには、各地に法勅を記した記念石柱を建立して領土を固持したAśoka 王の統治を想起させる目的が含まれていたと考えられよう¹⁶。

それに対して、「転輪王」図と同時代に描かれていた仏教における法輪柱の図像は、Bhārhut、Bodhgayā (Śunga B.C.1) 等に作例が残る。「法輪を回転させる」というフレーズで喩えられるブッダが教えを説く姿が法輪柱によって象徴的に描かれている(図4参照)。つまり、両者に同じ法輪柱を描くことで図像においても、Nālaka-sutta、Sela-sutta 等の韻文資料に語られるような、ブッダが自らの教えを宣布する姿を、転輪王が理想の政治を遂行する姿に準えて表現していると言える。

以上、Nālaka-sutta 第684詩節における「初転法輪」図の情景として指摘した2点が、初転法輪伝説を離れた最初期の文献資料と図像資料中にどのように表現されるのかを確認した。「初転法輪」図の成立以前、もしくは同時代に、これら2点の「初転法輪」図の情景は、初転法輪伝説とは別の背景に基づいて

表現されている。では「初転法輪」図の情景の一つとして挙げられるが、Nāḷaka-sutta 第 684 詩節には言及されなかった説法の対象者はどうであろうか、次に精査することにした。

(3) 説法の対象者（五比丘）

Gandhāra 地域から出土した「初転法輪」図によって確認される「初転法輪」図の情景は、鹿・法輪・五比丘であったが、先に引用した Nāḷaka-sutta 第 684 詩節のブツダの初説法について触れる記述には、説法の対象者に言及した箇所は見られない。初転法輪伝説を伝える諸文献のうち、初期經典中の散文資料に伝承される説法の対象者に関する記述は、「五群の比丘」(*pañcavaggiyā bhikkhū*) とだけ記述する *SN. Khandhavagga* の *Khandha-saṃyutta* に属する *SN.22.59 (Pañca)* = 『雑阿含經』(34) と *MN.26, Ariyapariyesana-sutta* = 『中阿含經』「羅摩經」の伝承と、「五群の比丘」のみならず、最初に悟りを開いた者としてコンダンニヤ (*Koṇḍañña*, 憍陳如) の名前を挙げる *SN. Mahāvagga* の *Sacca-Saṃyutta* に属する *SN.56.11-12 (Tathāgatena vutta 1-2)* = 『雑阿含經』(379) の伝承と、大きく 2 つに大別される¹⁷。諸部派の律 (受戒犍度部) とブツダの一生涯を物語る仏伝文学として初転法輪伝説が伝承される次の段階では、ほぼ全ての文献資料中に五比丘それぞれの具体的な名前が挙げられている。北畠利親 [1998] は諸部派の律と漢訳の仏伝經典中に記述される五比丘の名前を対照表記して整理し、五比丘の実像を検討している¹⁸。五比丘のうち、具体的な特徴が他の文献資料によっても確認出来るのは長老コンダンニヤのみであり、他の四人は僅かな記述があるものの、それ以上は探り難い¹⁹。また *Theragāthā* 第 673-688 詩節に収められた長老コンダンニヤが唱えたとされる詩には、初転法輪伝説を踏まえて創作されたと推測される詩節が存在する²⁰。このように初転法輪伝説を伝える諸文献中の記述を整理すると、五比丘の記述が次第に付加されていった過程を眺めることが出来る。但し、説法の対象者である五比丘は、すでに考察した「初転法輪」図の情景として指摘出来る 2 点とは異なり、初転法輪伝説を離れた文献資料と図像資料中に見出せない。従って、初期經典

の散文資料においてブツダの説法内容が具体的に語られ始めると同時に、その説法内容を聴聞する者として五比丘を登場させた経典が創作されたと解すべきであろう²¹。

他方、図像資料においては、説法の対象者である比丘が描き込まれている最初期の図像表現に、Mathurā の入口飾り板 (A.D.1 中頃: Museum of Fine Arts, Boston; 1926. 241.) が挙げられる。三日月形の枠内の左端に描かれた法輪柱に対して2頭の鹿と2人の大衣を纏って合掌する比丘が姿勢を向けている (図5参照)。高田修 [1967] は、この図像を法輪柱で表現された初転法輪のブツダを礼拝供養する図であると解釈し、この図像中に大衣を纏った比丘の姿が描かれていることに注目している。周知のようにインド古代初期仏教美術では、ブツダの姿のみならず仏弟子(比丘)の姿を表現することも避けられていた。その比丘の姿を描いたかなり早期の作例が現存することに対して、高田修 [1967] は、そこに一発展があったことを認め、仏像に先行して仏弟子(比丘)の姿が造形され始めていたことを指摘している²²。次項に論じるインド古代初期仏教美術における「初転法輪」図はその前段階の作例であり、法輪の周囲に四天王や多数の神々を配すだけで、説法の対象者である五比丘は描かれない。その理由として考えられるのは、ブツダや仏弟子(比丘)姿を表すことを避けるために他ならない。従って、文献資料に即して五比丘を描写する図像は、ブツ



図5 Mathurā 入口飾り板(部分拡大) 1世紀中頃 ボストン美術館蔵

表1 インド内陸部の主な作例

出土地	所在(現所在地)	年代	出典
Ajañtā	第10窟左側壁面	Sātavāhana B.C.1	Schlingloff [2000]. vol. III, X, 12.
Sāñcī	第1塔西門第二横梁正面	Sātavāhana A.D.1 初	全集 13. 挿図 61.
Kanganhalli	上段レリーフ石版 (Kanganhalli 01)	Sātavāhana A.D.1 後	科学研究費報告書 [2011] p. 63.
Amarāvātī	チェンナイ州立博物館	Sātavāhana A.D.2	Sivaramamurti. Pl. 20, fig. 2, Pl. 37, fig. 3.
Amarāvātī	描き起し図	Sātavāhana A.D.2	Fergusson. Pl. 71, fig. 2.
Amarāvātī	大英博物館	Sātavāhana A.D.2	Nnox. pl.11, 63, 82, 88, 89, 101.
Kanganhalli	横石	Sātavāhana A.D.2-3	筆者撮影 (図9を参照)
Nāgārjunakoṇḍa	Nāgārjunakoṇḍa 博物館	Ikṣvāku A.D.3	Longhurst. pl. 23 (a), 24 (a), 29 (b).

ダや仏弟子(比丘)の姿を積極的に造形化した Gandhāra 地域から出土した「初転法輪」図の作例まで下ることになる。

以上、「初転法輪」図にみられる鹿・法輪・五比丘の情景描写が文献資料と図像資料にどのように描写され始めるのかを順に整理して考察した。Bhārhut, Bodhgayā の段階では、ṛṣipātana と(法)法輪は個別の図像によって確認出来るが、「初転法輪」図と特定出来る図像は確認されない。初転法輪伝説が図像によって表現され始めるのは、Sāñcī 第1塔の「初転法輪」図以降である。従って次に、インド古代初期仏教美術にみられる「初転法輪」図の図像学的特徴を観察する。

3. インド古代初期仏教美術における「初転法輪」図の図像学的特徴

Nālaka-sutta から「初転法輪」図の情景として指摘出来ることは、(1)ブツダが初めて説法した場所と、(2)初めての説法が(法)法輪を回転させると表現されることの2点であった。Sāñcī 第1塔の西門第二横梁正面に描かれた図像中に、この2つの情景を合わせた表現を見ることが出来る。以下にその特徴を



図6 Sāñcī 第1塔 西門第二横梁正面 1世紀初

挙げる(図6参照)。

- ①法輪を載せた台座を中央に置き、法輪の上に傘蓋を表すことで法輪そのものがブツダを表現している。
- ②台座の両端に一對の鹿を配し、鹿野苑を暗示している。
- ③4人の男性(四天王)が合掌したポーズで立ち、姿勢を法輪の方へ向けている。
- ④その上方には翼を広げた天人が花綱を掲げている。

中央の主要な図像表現(法輪・鹿・四天王)の両側に、それぞれ6人の合掌した神々を描き、背景に樹木を配すことで、この場面が林の中での出来事であることを示している。そして背景の前面に鹿の群を加え、この出来事が鹿野苑での出来事であることに限定している。また、類似した特徴を表す図像が Ajanṭā 第10窟の左側壁面にも現存し、Schlingloff [1988] によって「初転法輪」図と同定されている。傘蓋を載せた法輪によってブツダを暗示し、両脇には多数の神々が全員で合掌しながら姿勢を中央の法輪へ向けている。上方には花綱を掲げた天人が空中に浮いている。背景に樹木を配すことで、場面設定が林の中であったことが分かる。残念なことに下部は剥落し、鹿の姿は確認出来ない。しかしながら、Ajanṭā 第10窟の左側壁面には仏伝の場面が時間軸に沿って描かれおり、その前後の場面が「降魔成道」と「舍利分配」であることから、この図像が「初転法輪」図であると見做すことが出来る²³。

最初期の「初転法輪」図は、仏弟子（比丘）の姿を表すことを避け、法輪に向かって合掌する四天王や大勢の神々だけを描いている。この点については、説法の対象者である仏弟子の代役として神々が描かれたと解釈することも可能であるが、文献資料の記述と合致しない。最初期の「初転法輪」図に描かれた四天王や大勢の神々の合掌する姿はどのような情景を表現しているのか、その手がかりを SN.56. 11-12 (Tathāgatena vutta 1-2) に辿ることが出来るので、該当箇所を挙げて検討したい。上述したように、この経典には五比丘と、ブツダの説法を聴聞して、一番初めに悟ったコンダンニャの名前が挙げられている。神々はコンダンニャに法眼が生じた後に登場する。

evam pavattite ca pana bhagavatā dhammacakke bhummā devā saddam anusāvesuṃ //etaṃ bhagavatā bārāṇasiyaṃ isipatane migadāye anuttaram dhammacakkaṃ pavattitaṃ appativattiyaṃ samaṇena vā brāhmaṇena vā devena vā mārena vā brahmunā vā kenaci vā lokasmin ti//²⁴ (SN. v. p. 423¹⁷⁻²²) 「またこのように、世尊によって法輪が転ぜられた時、地上の神々（＝地居天）は声に出して宣言した。パーラーナシーのイシバタナ・鹿野苑で、沙門、バラモン、神々、マーラ、梵天、あるいはこの世の誰によっても反転されることの無い、この無上の法輪が世尊によって転ぜられた、と」

続いて四天王、三十三天の神々等が次々と、地上の神々と同じフレーズを復唱している²⁵。神々は経典の最終場面に登場し、ブツダが初めて説法を行ったことを声に出して承認している。五比丘と神々の役割を区別して語る SN.56. 11-12 に登場する神々の姿を考慮するならば、法輪に向かって合掌する大勢の神々は、五比丘のような説法の対象者として表現されているのでは無く、ブツダが初めて説法を行ったことを認めて、合掌礼拝している姿を表現していると解釈されよう。なお、この記述には、先に提示した Sela-sutta 第 554 詩節の語句が引用されており、Sela-sutta 第 554 詩節と初転法輪伝説の接点が見受けられる²⁶。

他方、Bhārhut、Bodhgayā に描かれていた法輪柱は、Sāñcī 第1塔でも「初転法輪」図と並行して描かれている(図7参照)。南門西柱正面に描かれたレリーフ「鹿野苑での法輪柱の供養」と名付けられた図像は、中央に傘蓋を載せた法輪柱が大きく描かれており、その両端には合掌したり、供物を持った男女が描かれ、上方には翼を広げた天人が花綱を掲げている。そして法輪柱の一番底辺に鹿を配置することによって、この出来事が鹿野苑での出来事であったことを示している。「初転法輪」図の情景である法輪と鹿が描かれて



図7 Sāñcī 第1塔 南門西柱
正面 1世紀初

いるにもかかわらず、これまで積極的に「初転法輪」図として理解されてこなかったのは、合掌する男性の他に供物を携えた女性が描かれてることにある。もし神々を描くならば、必ず王侯貴族の姿をした男性のみで描かれていたであろう。実際に建立された Aśoka 王柱では無く傘蓋を載せた法輪柱を描くことで、初転法輪伝説時のブツダを表現し、在家信者が初転法輪の地である Sārnāth (鹿野苑)を訪れて、礼拝供養する姿を図像化したと考えられる²⁷。高田修 [1967] は、特に初期の仏教徒がブツダの事蹟に関係する遺物・記念物を崇拝し、それらを通してブツダとその事蹟を想見していたことを指摘している²⁸。また、インドの仏伝を三類型にまとめた宮治昭 [1995] は、このような慣習に基づいて成立した仏蹟・聖蹟を軸に展開する仏伝表現をそのうちの一類型として挙げている。その表現は Sāñcī に萌芽がみられ、やがて Mathurā や Sārnāth ではブツダの主要な事蹟を四相図、八相図等にまとめて描く傾向が顕著になる。

以上のことから、Bhārhut、Bodhgayā ではブツダが教えを説く姿として表現されていた法輪柱の図像が、Sāñcī の段階になると、底辺に鹿を合わせて描き、鹿野苑という具体的な場所を設定するようになった。すなわち、法輪柱は

「ブツダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとしての機能を果していると言える。このような法輪柱と鹿を描写したレリーフは Kanganhalli の下段レリーフ石版にも見ることが出来る。次項では、Kanganhalli における「初転法輪」図と法輪柱の図像表現について観察する。

4. Kanganhalli の「初転法輪」図と法輪柱

これまで考察してきた「初転法輪」図の成立とその背景を踏まえて、Kanganhalli から出土した「初転法輪」図がどのような図像表現を保存し、伝承していたのかを最後に考察する。本稿で取り上げる Kanganhalli 01 は 2009 年の研究調査段階で、南門正面付近に復元した状態で置かれていたことが確認出来る²⁹。すでに筆者は別稿にて、研究史料に基づく復元作業を試み、59 枚の上段レリーフ石版のうち本来の場所が特定不能なレリーフ石版は Kanganhalli 01 を含む 19 枚であることを指摘した。そして Kanganhalli 01 を含めた 19 枚の上段レリーフ石版のほとんどが東門から南門までの四分円部分に配列されていたことを表示している³⁰。上段レリーフ石板は、隣接するレリーフ石版と組み合わ

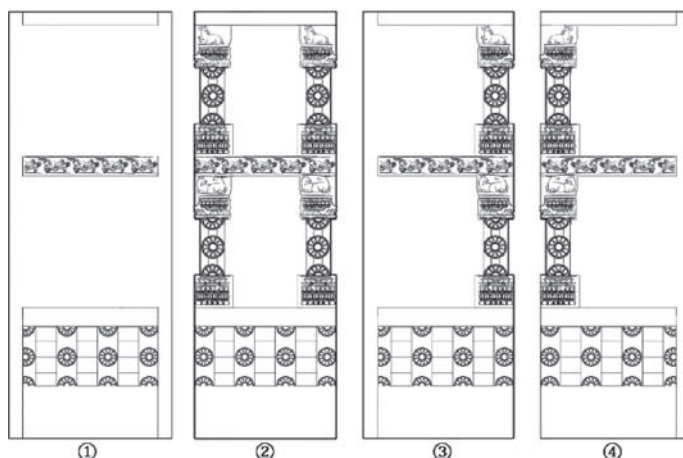


図8 Kanganhalli 上段レリーフ石版 タイプ別解説図

せるために、両端の枠部分に施された壁柱 (pilaster) の有無によって4タイプ(①～④)に分類される(図8を参照)。Kanganhalli 01 は、59枚の上段レリーフ石版のうち2枚しか発見されていない①のタイプに当たる。①のタイプは、③と④のレリーフ石版を切り替える、いわばスイッチの役割を果たし、東門から南門までの四分円部分のどこかに配置していたと推測される³¹。Kanganhalli の「初転法輪」図は、Kanganhalli 01 の上区画に位置する。残念なことに Kanganhalli 01 は破損が激しく、下区画はレリーフの断片が一部残るのみであり、碑文と蓮弁で装飾された欄楯が彫刻されている一番下部分は発見されていない。以下にその特徴を挙げる(図9を参照)。



図9 Kanganhalli 01 上段区画 1世紀初

- ①中央に空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くことで、ブッダが座していることを暗示している。
- ②椅子の背に法輪が設置されている。
- ③法輪の中央に獅子を描き、獅子が吼える姿(獅子吼)が描写されている。
- ④4人の男性(四天王)が合掌した姿勢で坐し、視線を法輪と中央の獅子の方へ向けている。

Kanganhalli 01 に描かれた「初転法輪」図は、ブッダを直接表現しないというインド古代初期仏教美術の特徴を踏襲している。空席の椅子を置き、その下に仏足跡を描くという表現は、Amarāvati にも類似した表現があり、Nāgārjunakoṇḍa ではその椅子の上に座すブッダの姿が描き出されている³²。この椅子の表現は、南インド特有の表現であろう。鹿が描かれていないことで、この図像

の出来事が鹿野苑という具体的な場所で起こった出来事であるのかは分からない。しかしながら、上段レリーフ石版より制作時期が遅い横石 (Sātavāhana A. D.2-3) が敷地内に 5 例発見されており、仏伝の場面が時間軸に沿って並んでいる。特徴として挙げた①～④の図像表現に加えて、背景に五比丘が描き込まれている図像が「降魔成道」図の横に 2 例存在し、そして Ajaṅṭā 第 10 窟に描かれた「初転法輪」図のように「降魔成道」と「舍利分配」の間に描かれている作例を 1 例確認出来ることから、Kanganhalli 01 の上区画に位置するレリーフは「初転法輪」図であると判断することが出来る (図 10 を参照)。③に挙げた法輪の中央に描かれた獅子の姿は、横石に描かれた「初転法輪」図にも表わされている。この獅子の姿は Amarāvati、Nāgārjunakoṇḍa にも見られない Kanganhalli 独自の表現であり、先に挙げた Nālaka-sutta 第 684 詩節に伝承される「彼は、仙人という名の林で、〔法〕輪を回転させるでしょう。あたかも、力を具え、鹿達を征服する獅子が吼えるように」という表現を文献に即して忠実に描写していると言えよう。このように Kanganhalli の「初転法輪」図は、ブッダが説法する姿を強調して描き、鹿野苑を暗示する鹿には関心が向けられていないことが分かる。

それに対して、法輪柱と鹿を描写した図像は、ストウーパの基壇を円環する

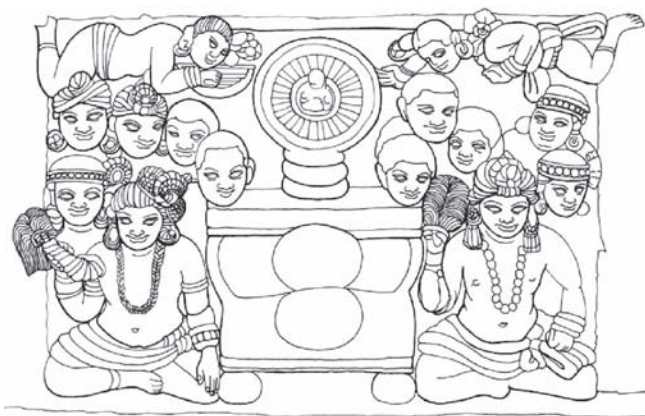


図 10 Kanganhalli 横石 (部分) 描き起し図 2-3 世紀

下段レリーフ石版に描かれている(図11参照)。Sāñcīの「鹿野苑での法輪柱の供養」に描かれた供養者や天人は存在しない。法輪柱と底辺に4頭の鹿を描いただけのシンプルな表現であるものの、情景描写に鹿を描き込むことで、Sāñcīと同じく法輪柱が「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させるシンボルとしての機能を果たしている。Sāñcīから始まったこのようなブッダの主要な事蹟を象徴的に描く図像表現は、同じ Sātavāhana 朝下で造営された Kanganhalli においても辿ることが出来る。



図11 Kanganhalli 下段レリーフ石版
1世紀初

5. おわりに

インド古代初期仏教美術にみられる「初転法輪」図の成立過程を整理し、その成立過程に基づき、Kanganhalli 01 に描かれた「初転法輪」図の図像表現と特徴をまとめると次のようになる。

インド古代初期仏教美術において初転法輪伝説は、「初転法輪」図と「鹿野苑での法輪柱の供養」図の2つの図像によって表現されている。特に「鹿野苑での法輪柱の供養」図に描かれる法輪柱は、本来、初転法輪伝説とは別の背景に基づいて図像化されたものである。しかしその後、法輪柱の底辺に鹿を配すことで、この出来事が鹿野苑での出来事であることを暗示するようになり、「初転法輪」図とは制作意図の異なる「ブッダが鹿野苑で説法を行ったこと」を礼拝者に想見させる図像へと展開している。このような初転法輪伝説に関する2系統の図像表現は Sāñcī から始まり、Kanganhalli のレリーフにも継承さ

れている。

Kanganhalli の上段レリーフ石板には比丘の姿を描いた図像が4例確認されている³³。ところが、Kanganhalli の「初転法輪」図は、五比丘の姿を表さず、法輪に向かって合掌礼拝する四天王だけを背景に描き込み、鹿野苑を暗示する鹿も描かれていない。代わりに、法輪の中央に獅子の姿を描き出し、ブツダが説法を行う姿の譬えとして Nālaka-sutta に記述される獅子が吼える姿（獅子吼）を忠実に表現している。この獅子の表現は、Amarāvati、Nāgārjunakoṇḍa にも類例が無い。Kanganhalli の「初転法輪」図は、何よりもブツダが説法する姿を強調して描いていることが分かる。このような Kanganhalli 独自の「初転法輪」図の図像学的特徴を、新たなインド古代初期仏教美術における「初転法輪」図の一例として加えることが出来よう。

インド古代初期仏教美術に位置づけられる Kanganhalli の上段レリーフには、*Bodhisatta* なる語の使用が始まり、さらにブツダに先行して仏弟子（比丘）の姿を造形し始めた直後の図像表現が保存されている。従って、図像の成立過程と細部の表現を考察することにより、同じ Sātavāhana 朝下で造営された Ajaṅṭā 前期石窟や Sāñcī よりも一段階発達した図像表現が如何なるものであったかを示すことが出来る貴重な史料であると言える。引き続き、Kanganhalli に保存される個々の仏伝図を解明し、Kanganhalli のストウーパを円環する上段レリーフ石版の仏伝場面がどのような配列で並んでいたのかを検討することを今後の研究課題としたい。

略号

Coom [1935]. = Coomaraswamy, Ananda K. *La Sculpture de Bodhgayā*. Paris, 1935.

Coom [1956]. = Coomaraswamy, Ananda K. *La Sculpture de Bharhut*. Vanoes, Editions d'Art et d'Histoire, Paris, 1956.

Fergusson. = Fergusson, James. *Tree and Serpent Worship : Illustrations of Mythology and Art in India in the First and Fourth Centuries after Christ, from the Sculptures of the Buddhist Temples at Sanchi and Amravati*. London, 1868.

Knox. = Knox, Robert. *Amaravati, Buddhist Sculpture from the Great Stupa*, London, 1992.

栗田. = 栗田功『ガンダーラ美術 I 仏伝（改訂増補）』ニ玄社, 2003.

- Longhurst. = Longhurst, A. H. *The Buddhist antiquities of Nāgārjunakoṇḍa, Madras presidency*
= *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, 54, Delhi, 1938.
- Mvu. = *Mahāvastu*, Senart, E. (ed.), 3 vols, Paris, 1882–1897.
- P. = Pāli
- Schlingloff [2000]. = Schlingloff, Dieter. *Erzählende Wandmalereien*. Vol. I Interpretation. Har-
rassowitz Verlag (Ajanta. Handbuch der Malereien 1), 2000.
- S. = Sanskrit
- 全集 13. = 肥塚隆・宮治昭編『世界美術史大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館, 2000.
- SN. = *Samyutta-nikāya*, Feer, L. (ed.), PTS, London, 1884–98.
- Sn. = *Suttanipāta*, Andersen, D. and Smith, H. (eds.), PTS, London, 1913.
- Svaramamurti. = Svaramamurti, C. *Amaravati Sculptures in the Madras Government Museum*,
Bulletin of the Madras Government Museum, repr. Madras, 1956.
- T. = 大正新脩大藏経 (Taishō Tripitaka), 高楠順次郎・渡邊海旭 監修 小野玄妙 編,
大蔵出版, 東京, 1924–1935.
- Thera. = *Thera- and Therī-gāthā*, Oldenberg, H. and Pischel, R. (eds.), second edition with ap-
pendices by Norman, K. R. and Alsdorf L., PTS, London, 1966.

図版出典

- 図 1 田辺勝美・前田耕作編『世界美術史大全集 東洋編 15 中央アジア』小学館,
2000, 図版 138.
- 図 2 Coom [1956]. fig. 251.
- 図 3 筆者撮影
- 図 4 Coom [1956]. fig. 62.
- 図 5 Quintanilla, Sonya Rhie. *History of Early Stone Sculpture at Mathura, CA.150 BCE–*
100 CE (Studies in Asian Art and Archaeology), Brill, Leiden, 2007. Fig. 285. (部分拡大)
- 図 6 全集 13. 挿図 61.
- 図 7 筆者撮影
- 図 8 筆者制作
- 図 9 科学研究費報告書 [2011] p. 63 から転載
- 図 10 筆者制作
- 図 11 科学研究費報告書 [2011] p. 54 から転載

参考文献

- 阿賀谷友宏 [2011] 『*Dhammapada-attakathā* における辟支仏の諸相』(大阪大学 修士論
文)
- Gonda, J. [1966] *Ancient Indian kingship from the religious point of view*, E. J. Brill, Leiden.
科学研究費報告書 [2011] 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果
報告書』(研究代表者 荒牧典俊), 龍谷大学仏教文化研究所.
- 北畠利親 [1998] 「仏伝における五比丘」『北畠典生博士古稀記念論文集: 日本仏教文化

- 論叢』永田文昌堂, pp. 81–105.
- 定方晟 [2002] 「法輪とフヴァルナ」『東海大学紀要 文学部』78巻, pp. 106–130.
- 静谷正雄 [1963] 「碑銘から見たサールナートの仏教」『印度学仏教学研究』11巻1号, pp. 132–133.
- 島田明 [2000] 「アーンドラ美術のブッダ像—浮彫像に見るその成立と展開—」『佛教芸術』249号, pp. 13–48.
- Schlingloff, Dieter [1981] “Die älteste Malerei des Buddhalebens,” Bruhn, Klaus & Albrecht Wezler (eds.). *Studien zum Jainismus und Buddhismus : Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*. Wiesbaden : Franz Steiner Verlag, pp. 181–198 (Alt- und Neuindische Studien 23).
- [1988] *Studies in the Ajanta Paintings, Identifications and Interpretations*. Delhi : Ajanta Publications (India).
- [2000] *Erzählende Wandmalereien*. Vol. I : *Interpretation*. Vol. II : *Supplement*. Vol. III : *plates*. Wiesbaden : Harrassowitz Verlag (Ajanta. Handbuch der Malereien 1).
- 高田修 [1967] 『仏像の起源』岩波書店.
- 谷川泰教 [2000] 「仏に二言はあるか—五比丘の帰仏をめぐって—」『密教文化』205号, pp. 116–174.
- 塚本啓祥 [1997] 「サールナート (鹿野苑) の今昔」『浅井円道先生古稀記念論文集 : 日蓮教学の諸問題』平楽寺書店, pp. 861–883.
- 中西麻一子 [2013] 「カンガンハリ遺跡調査報告—上段レリーフ石版に描かれた仏教説話の配列を巡って—」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』41号, pp. 73–87.
- 中野義照 [1956] 「原始仏教における転輪聖王」『密教文化』32号, pp. 4–19.
- 平岡聡 [2010 a] 『ブッダの大いなる物語 上 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』大蔵出版.
- [2010 b] 『ブッダの大いなる物語 下 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』大蔵出版.
- 藤田宏達 [1954] 「転輪聖王について」『印度学仏教学論集 : 宮本正尊教授還暦記念論文集』三省堂出版, pp. 145–156.
- 増谷文雄 [1881] 『仏陀の伝記—資料の研究—(増谷文雄著作集5)』角川書店.
- 水野弘元 [1996] 「『転法輪経』について」『仏教文献研究 水野弘元著作選集 第一巻』春秋社, pp. 243–273.
- 宮治昭 [1993] 「宇宙主としての釈迦—インドから中央アジア・中国へ—」『曼荼羅と輪廻—その思想と美術』立川武蔵 (編), 佼成出版社, pp. 235–269.
- [1995] 「インドの仏伝美術の三類型」『佛教芸術』217号, pp. 15–32.
- [2005] 「南インドの転輪聖王の図像—マンダール王説話図を中心に—」『頼富本宏博士還暦記念論文集マンダラの諸相と文化 下』法蔵館, pp. 163–184. (『インド仏教美術史論』中央公論社, 2010. 再録.)
- Lüders, Heinrich [1941] *Bhārhat und die buddhistische Literatur*, (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, 26–3), Leipzig.
- [1963] *Bhārhat Inscriptions*, Revised by E. Waldschmidt & M. A. Mehendale.

Ootacamund : Government Epigraphist for India (Archaeological Survey of India, Corpus Inscriptionum Indicarum II. 2).

Zin, Monika [2010] “Mandhatar, the universal monarch, and the meaning of representations of the cakravartin in the Amaravati School, and of the kings on the Kanganhalli stupa,” In Proceedings of the International Congress “Buddhist Narrative in Asia and Beyond,” Chulalongkorn University, Bangkok.

——— [2011] “Narrative Reliefs in Kanganhalli” – A short Outline of Their Importance for Buddhist Studies,” In *Marg* 63–1, pp. 12–21.

附記

本稿は平成 20–22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 20520050 による研究成果の一部である。末筆ながらここに記し、感謝申し上げます。

註

1 ブッダの初転法輪伝説を伝える文献資料を収集整理し、5 グループ (I~V) に大別し以下に挙げる。

I. Pāli : 1. *Sutta-nipāta* (*Sn.*) Nālakasutta, v.684 [*Sn.*132¹⁷–133²] 2. *Samyutta-Nikāya* 22, Kandha-Samyutta 59, Pañca. (*SN.* iii. 66²⁴–68²⁹) = 『雑阿含経』 (34) [T. 2 No. 99, 7 c 13–8 a 4] 求那跋陀羅訳 435–443. 3. *SN.* 56, Sacca-Samyutta 11–12, Tathāgatena vutta (1–2) (*SN.* v.420²⁴–425¹²) = 『雑阿含経』 (379) [T. 2 No. 99, 103 c 13–104 a 29] ≅ 『転法輪経』 [T. 2 No. 109, 503 b 3–503 c 23] 安世高訳 = 『三転法輪経』 [T. 2 No. 110, 504 a 5–b 22] 義浄訳 = *Dharmacakrapravartana-Sūtra* (Ed. Feer.) 4. *Majjhima-Nikāya* 26, Ariyapariyesana-sutta (*MN.* i. 171¹⁸–175¹¹) = 『中阿含経』 「羅摩経」 (204) [T. 1. No. 26, 777 b 7–778 c 7] 僧伽提婆訳 397–398. 5. *Dīgha-nikāya* (*DN.*) 14. Mahāpadāna-suttanta (MAP.) 3, 8–13 [*DN.* ii. 40³–42¹⁵] = Mahāvādāna-sūtra (MAV.) [Ed. Fukita, p. 146–148] [東トルキスタン有部] = 『長阿含経』 「法藏部」 [T. 1 No. 1, 8 c 26–9 c 6] 仏陀耶舎・竺仏念共訳 413. 7. *Jātaka-attha-vaṇṇanā, Nidhānakathā* (*Nid.*) [*J.* i. 81¹⁷–82¹⁹] II. (根本) 説一切有部 : 1. *Dirghāgama, Catuspariṣatsūtra* (Cps.) 11.1–15.19 (Ed. Waldschmidt. 132–170, 444–449) ≅ 『衆許摩訶帝経』 [T.3 No.191, 953–c 3–954 b 26] 法賢訳 985–994. 2. *Mūlasarvāstivādin Vinaya, Saṅghabhedavastu* (*Sbhv.*) [Ed. Gnoli. 133¹–139¹⁷] = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 [T. 24 No. 1450, 127 a 19–128 c 11] 義浄訳 700–711. III. 諸部派の律 (受戒羯度部) : 1. *Vinaya* (*Vin.*) Mahāvagga 6, 5–47 (*Vin.* i. 7³⁵–14³⁸) = 『増一阿含経』 「高幢品 24–1」 (5) [T. 2 No. 125, 618 a 27–619 b 18] 瞿曇僧伽提婆訳 397. 2. 『四分律』 (法藏部) [T. 22 No. 1428, 787 c 13–789 b 4] 仏陀耶舎・竺仏念訳 408. 3. 『彌沙塞部和醯五分律』 (化地部) [T. 22 No. 1421, 104 a 11–105 a 25] 仏陀什・竺道生訳 423–424. IV. 仏伝 (1) : 1. *Mahāvastu* (*Mvu.*) [大衆部説出世間部] [Ed. Senart. iii. 328²⁰–340¹⁵] ≅ 『仏本行集経』 [T. 3 No. 190, 809 a 27–810 b 6] 闍那崛多訳 523–600. 2. *Lalitavistara* (*Lv.*) ch. 26 (Ed. Lefmann. 407¹²–418²¹) = 『普曜経』 [T. 3 No. 528 c 13, 530 c 14] 法護訳 308. = 『方広大莊嚴経』 [T. 3 No. 187, 605 a 15–606 a 6] 地婆阿

- 羅訶訳 683. 3. 『中本起経』 [T. 4 No. 196, 147 c 5–149 c 12] 曇果・康孟詳訳 207. 4. 『十二遊経』 [T. 4 No. 195, 147 a 2–a 3] 迦留陀伽訳 281. 5. 『太子瑞应本起経』 [T. 3 No. 185, 480 c 14–c 19] 支謙訳 222–226. 6. 『異出菩薩本起経』 [T. 3 No. 188, 617 b 12–620 c 8] 聶道真訳 280–312. 7. 『僧伽羅刹所集経』 [T. 4 No. 194, 137 c 19–c 27] 僧伽跋澄訳 384. 8. 『過去現在因果経』 [T. 3 No. 189, 644 a 13–645 a 14] 求那跋陀羅訳 394–468. 9. *Śākyasiṃhajāta* (*Śsj.*), v.100–114 [Ed. Hahn. 167¹⁸–169¹²] V. 仏伝 (2) : 1. *Buddhacarita* (*Bc.*), *Aśvaghōṣa* 著, ch.15, v.15–58 [Transl. Johnston. 30–35] = 2. 『仏所行讚』 [T. 4 No. 192, 28 c 19–30 c 5] 曇無讖訳 414–426. = 3. 『仏本行経』 [T. 4 No. 193, 87 a 5–88 b 3] 宝雲訳 424–453. = 4. *Divyāvadāna* (*Divy.*) No. 27 (Ed. Cowell. 393^{21–26}) = 5. 『阿育王伝』 [T. 50 No. 2042, 104 a 17–19] 安法欽訳 306. = 6. 『雜阿含経』 [T. 2 No. 99, 167 b 20–25] 求那跋陀羅訳 435–443. = 7. 『阿育王経』 [T. 50 No. 2043, 137 c 28–138 a 4] 僧伽婆羅訳 512.
- 2 「インド美術史という古代初期とは、インドが歴史時代に入った前 6–5 世紀ころからクシャーン族の侵入する 1 世紀後半までを指し、前 2 世紀後半ころ初めて仏伝図が作られるようになった」(肥塚隆『美術に見る釈尊の生涯』平凡社, 1979, p. 120)
- 3 グプタ朝以降の「初説法」図については、宮治昭 [1993] にその図像学的特徴と展開が論じられている。
- 4 注 1 に挙げた初転法輪伝説を伝承する文献資料のうち、「初転法輪」図を表すために必要な要素である鹿・法輪・五比丘を合わせて物語る最も古い文献として *MN. 26, Ariyapariyesana-sutta* が挙げられる。パーリ所伝のニカーヤに収められたこの經典は、仏伝の出家から初転法輪までを語り、ブツダの生涯を時系列にまとめて編集した最初の試みと言える。しかしながら、この經典の本来の目的は、仏伝を説くことでは無く、ブツダがどのような方法で「邪求」と「聖求」を識別したのかを説くことにある。増谷 [1981: pp. 143–145] はそれぞれの物語がどのような原資料によって編集されたものかを表示している。
- 5 Lüders [1941] によれば、*Mvu.* は 500 人の辟支仏について述べているが、図像では 500 人を 5 人に略して表現している。
- 6 *ālabdhavīryā satatānuyogī udagracittā akuśīdavarī/ dr̥ḍhāvikramā vīryabalopapetā eka-carā khaḍgaviṣāṇakalpā// vaihāyasam abhyudgamyā tejodhātum samāpadyitvā anupādāya parinirvṛtā//svakāye tejodhātūye mānsaṇitam̐ dhyāpitam̐/sarīrāṇi patitāni//* (中略) *ṛṣayo 'tra patitā ṛṣipatanam̐.* (*Mvu.* I, pp. 357–359) 「彼らは精進し、絶えずヨーガに従い、気高い心を持ち、怠惰なく実践し、堅固な勇氣を持ち、精進力を具え、犀の角のように、独り行じる者である。彼らは空中に向かって上昇し、火界〔定〕に入り、執着せずに般涅槃した。自らの火界〔定〕で肉と血を焼かれた。諸々の骨が落ちた。(中略)ここに聖仙 (ṛṣi) たちが落ちた〔ので〕リシパタナ〔という名で呼ばれるのである〕」
- 7 シュリングロフはこの図像を「樹下観耕」と解釈している (Schlingloff [2000: pp. 52–54] 参照)。
- 8 *mṛgāṇam̐ dāyo dinno mṛgadāyo ti ṛṣipattano//* (*Mvu.* p. 366) 「鹿達に〔安全という〕施物が与えられたのでリシパッタナはミガダーヤと〔も言う〕」*Mvu.* では鹿野苑とい

- う地名の由来として語られており、ブッダの過去世の話としては語られていない（平岡聡 [2010 a: pp. 251–261] 参照）。また、ニグロータ鹿王前世物語は *Bhārhut* に描かれている（Lüders [1963: pp. 127–128] 参照）。
- 9 *Bhārhut*: Coom [1956]. fig. 28, 62, 66. *Bodhgayā*: Coom [1935]. Pl. 27.2, 49.3.
 - 10 Lüders [1963: pp. 113–118] は建物の屋根に刻まれた碑文を「世尊の法輪」*Bhagavato dhamachakam* (B 38)、続けて右下の碑文を「コーサラ国 プラセナジット王」*rājā Pasenaji Kosalo* (B 39) と解説している。従って、この図像はブッダとプラセナジット王に関連した内容の図像であると解釈できる。リューダースはフォーシェがこの図像を「舎衛城の神変」と同定したことを否定し、この柱の隣り合う3面それぞれに *sambodhi*, *parinirvāna*, *dharmacakrapravartana* を描くことでブッダの人生における3つの出来事を暗示していたのではないかと示唆している。
 - 11 『原始仏典 第七巻 ブッダの詩 I』講談社, 1986, p. 220 参照。
 - 12 名前の語源的意味については種々の説が存在する（藤田宏達 [1954] 注9 参照）。転輪王という名が持つ輪の意味は、定方晟 [2002] によって考察されており、彼は戦車を意味するのが妥当としている。
 - 13 宮治昭 [2005] はマーンダータ王説話図の一例として *Jaggayyapeṭa* の図像を詳細に解明している。その図像に関して宮治昭 [2005] は「マーンダータ転輪聖王の説話を背景にしながらも、説話的要素は稀薄で、(中略) 転輪聖王自身を強調した表現となっている」と指摘している。その転輪王図と全く同じ構図で描かれた図像が *Kanganhalli* から出土した。その *Kanganhalli* 48 の図像に伴う碑文には、マーンダータ本生とは記されずに、「転輪王 [と] 七宝」*rāyā-cakamvaṭṭi sata-radaṇā* と記されている（科学研究報告書 [2011: p. 85, 100], Zin [2010] 参照）。
 - 14 藤田宏達 [1954] は、*DN. 26. Cakkavatti-sihanāda-suttanta* の記述に基づき、「[天の] 輪宝」*[dibbam] cakkaratanam* が、転輪王が全大地を運行する状態を太陽の運行を喩えて描いていることから、太陽の威光が輪宝として象徴されているとする。しかし定方晟 [2002] が指摘するように、七宝の一つである輪宝は *cakkaratanam* と呼ばれ、出没する輪の方は *dibbam cakkaratanam* と呼ばれており、両者を区別していることから、全く同じものかは疑問の余地があるとする。
 - 15 *DN. 26. Cakkavatti-sihanāda-suttanta* (*DN. iii. 61–62*) では、聖なる転輪王の務め (*ariyam cakkavatti-vatta*) についての具体的な記述がある。そこにおいても法による統治が語られている。
 - 16 全集 13. figs. 4 a, 4 b. 塚本啓祥 [1997] 参照。*Sārnāth* の *Asoka* 王柱に記された碑文の内容は、仏教の教団分裂を誡めたものであり、初転法輪に関する内容では無い。
 - 17 「五群の比丘」(*pañcavaggiyā bhikkhū*) という表現は、パーリ伝承のみに見られる。*Cps.* と *Sbhv.* では「五人の比丘」(*pañcakā bhikṣavaḥ*) と記され、*Mvu.* では「五人の良き仲間」(*pañcakā bhadravaggiyāh*) と記している（平岡聡 [2010 b: p. 412] 参照）また *Cps.* もコンダンニヤ (*Kauṇḍinya*) の名前を挙げている。（*Cps. Ed. Waldschmidt. 152, 447*）
 - 18 北畠利親 [1998: pp. 98–99] 表2, 表3 参照。

- 19 他4人についての僅かな記述に関しては北畠利親 [1998: pp. 94–46] を参照。
- 20 *Theragāthā* v.679 [*Thera.* p. 69¹²⁻¹³] *buddhānubuddho yo thero koṇḍāṇṇo tibbanikkamo, pahīnaṅgātimaraṇo brahmacariyassa kevalī*. 「強い出離の思いを持つ長老コンダンニャは、ブッダに従ってブッダとなった。生死を捨てて、清浄なる行いを完成した者である」(並川孝儀「初期經典にみられる仏弟子の表現」日本佛教学会第82回学術大会, 2012, 発表資料参照)
- また長老ヴァンギーサが唱えた詩にも長老コンダンニャと初転法輪伝説に関連する詩節が収められている。*Theragāthā* v.1244 [*Thera.* p. 111²⁷⁻²⁸] *pajjotakaro ativijja sabbaṭṭhiṇaṃ atikkamaṃ addā, ñātvā ca sacchikatvā ca, aggaṃ so desayi dasaddhānaṃ*. 「ともしびを作る人は、洞察して、あらゆる立場の超越を見た。そして、理解し、明らかにして、彼は5人に最初に説き示した」
- 21 諸部派の律やブッダの一生涯を物語る仏伝文学では、初転法輪伝説の情景描写の一つとして重要な五比丘に具体的な名前を付加したり、ブッダと五比丘に関するエピソードを新たに挿入している。それに対応する作例として、ブッダの説法する場所に座具を運ぶ五比丘の姿を描いた図像が Gandhāra から多数出土している。(栗田, Pl. 267, 271, 272, 273, 277, 278, 279)
- 22 南インド地域 Amarāvātī においてブッダの姿に先行して仏弟子像が表されたことについては、島田明 [2000] に詳しく論じられている。高田修 [1967] の指摘以降、Kauśāmbī (Śunga B.C.1 : 欄楯柱) や Kanganhalli 14/19, 39, 44, 59 (Śātavāhana A.D. 1 : 上段レリーフ石版) からもブッダの姿に先行して仏弟子を描いた極めて早期の図像が出土している。(Tripathi, Aruna. *The Buddhist art of Kauśāmbī* (from 300 BC to AD 550), New Delhi, 2003. fig. 28. 科学研究費報告書 [2011 : pp. 70, 81, 83, 91])
- 23 Schlingloff [1988 : pp. 1–13, 64–72] 参照。シュリングロフは、左側の神々の背景にマンゴーの木が一本描かれていることに着目し、それが唯一、この場面で鹿野苑であることを暗示していると解釈している。Ajañṭā 第10窟の壁画は、左壁に一連の仏伝が並ぶ。順序は「兜率天の菩薩」→「誕生」→「七歩」→「樹下観耕」→「降魔成道」→「初転法輪」→「舍利分配」→「帰城」と時間軸に沿って並んでいる。向かいあう右壁には、「シュヤーマ本生」と「六牙象本生」が並ぶ。
- 24 漢訳の平行は次の通り。『雑阿含経』(379)「転法輪」[T. 2 No. 99, 104 a 14–a 18] 地神擧聲唱言。諸仁者。世尊於波羅捺國仙人住處鹿野苑中、三轉十二行法輪。諸沙門婆羅門、諸天魔梵、所未曾轉、多所饒益、多所安樂。哀愍世間、以義饒益。利安天人、增益諸天衆、減損阿修羅衆。
- 25 *bhummānaṃ devānaṃ saddaṃ sutvā cātummahārājikā devā saddam anussāvesuṃ//etaṃ bhagavatā bārānasiyaṃ isipatane miḡadāye anuttaraṃ dhammacakkaṃ pavattitaṃ appativatiyaṃ samaṇena vā brāhmaṇena vā devena vā mārena vā brahmunā vā kenaci vā lokasminti // (SN. v. p. 423²³⁻²⁷)* 「地上の神々の声を聞いて、四天王は声を発して宣言した(以下略)」
- 26 *Vin. Mahāvagga* 6, 30 (*Vin.* i. 11³⁷⁻¹²) にも、神々が声に出して宣言する場面が記されている。

- 27 このような聖地を巡礼する習慣はインドで古くから行われており、*Divyāvadāna* の第 26 章～第 29 章を形成する一連の *Aśoka* 王の伝記 (*Aśokāvadāna*) の第 27 章には、*Aśoka* 王が巡礼した仏の誕生から涅槃までに縁のある 32 の事蹟が挙げられている。
- 28 高田修 [1967: pp. 53–55] 参照。
- 29 科学研究費報告書 [2011: pp. 103–104] 「Kanganhalli-Stupa 平面図」参照。
- 30 拙稿 [2013] 図 9 を参照。
- 31 4 枚のスイッチとしての役割を果たす上段レリーフ石版の存在と、4 タイプの分類については Zin [2011: p. 17] に言及されている。
- 32 *Amarāvati*: Fergusson. Pl. 71, fig. 2. *Nāgārjunakoṇḍa*: Longhurst. pl. 23 (a), 24 (a).
- 33 仏像に先行する仏弟子(比丘)の造形に関しては注 22 を参照。